

コロンビア・オリバレス公園整備計画におけるデザイン支援の現状と課題

福岡大学大学院工学研究科 学生会員 ○相良由貴
福岡大学工学部社会デザイン工学科 正会員 柴田 久, 石橋知也

1. はじめに

国際協力機構 JICA によれば、開発途上国における低所得者層は経済危機や紛争、災害などの影響を受けやすく貧困の悪化するリスクを常に負っている¹⁾。貧富の格差拡大は社会の不安定要因であり、人々が貧困から抜け出し、公正な成長と健康で文化的な生活を営めるようになることは、途上国の発展のみならず国際社会の安定のためにも重要である。しかし、途上国において景観やデザインの専門家がアドバイザーとして携わる計画の成果・課題等について考察した研究は未だ希少である。

本研究では、貧困層の住宅改良事業とともに公園整備の行われるコロンビア・マニサレス市オリバレス公園整備計画(Parque Olivares de Manizales, Colombia)を事例に、景観アドバイザーとして携わった計画プロセスならびに調査活動の成果を整理し、提案に至った社会福祉施設のデザインについて報告する。さらにこれまでの活動経緯を踏まえ、途上国に対するデザイン支援の現状と課題について考察することを目的とする。

2. マニサレス市サンホセ地区における公園整備の概要

(1) サンホセ地区における住民生活の現状

マニサレス市サンホセ地区は面積 1,110,500m² で、市の中心部に位置している。当地区には約 24,000 人(4000 世帯)が居住しており、その内 1,660 世帯(41.5%)が崩壊の恐れのある危険な斜面に住んでいる(写真-1)。また一住居に複数の世帯が同居しているところも多く、2,665 世帯の住居が不足し、さらに本地区住居の 61%は竹や bahareque (石などの間に牛の糞や土を混ぜたもの)、段ボールなどによって造られた掘立小屋となっている。地区住民の 9 割以上の人々が斜面崩壊の危険性が高く生活水準の低い劣悪な居住エリアに住んでいる。特に貧困層の多いオリバレス地区の住民はとうもろこしの粉で作った「Arepá」の路上販売や街頭で拾った新聞、使えそうなゴミなどの再販売により生計を立てている。

(2) 調査・検討経緯と関係主体の体制について

本支援活動は、コロンビア政府の要請で派遣された JICAシニアボランティア(以降:SV)の主要な業務内容が「景観設計・緑地帯(公園)設計」であったことに対し、同SVの専門性と経験数が浅く、これを支援する専門家としてJICAから筆者らに依頼があったことに始まる。プロジェクト全体の都市計画及びオリバレス公園の基本計画はマニサレス市役所都市計画課が担い、整備段階には同市役所内部の都市再生機構(以下、ERUM)が事業ごとの実施設計や施工に関わる発注業務を行っている。さらに2011年からは元ERUMの職員らによって発足された財団FESCOが開発予定地区および混合地区の土地利用案ならびに新築アパートメントの建築計画等に対する住民との合意形成業務を担当している。さらにマクロ・プロジェクト「サンホセ」に関わる予算の管理・運用は信託組織(P.A.)が担当し、住宅は国の、道路等の公共施設は市の単独予算によって建設されている。加えて公園対象地周辺の地質など、専門的な調査データに関してはコロンビア国立大学に情報提供を依頼し、約一年半に渡る協議や合同の現地踏査等が行われている。

3. オリバレス公園およびその周辺の再開発事業の現状

本事業の景観アドバイザーである筆者らは2011年9月5日～9月15日に第一回現地踏査を行っており、オリバレス公園の全体設計コンセプト(図-1)と新設アパートメントの配置修正計画の提案を行った。さらに筆者らは第二回現地踏査を2012年9月5日～15日に実施し、整備計画の進捗状況と現状を把握している。

(1) サンホセ地区における再開発事業の現状

第二回現地踏査の結果からマクロプロジェクト「サンホセ」には2012年11月までに200億ペソ(約10億円)の投資がなされ、道路や橋の建設、土地取得が進んでいる現状が確認された。さらに各事業の進捗状況について都市計画課等から実態に関わる情報を入手した。

(2) 公園整備に対するサンホセ地区住民との意見交換

第二回現地踏査期間中の2012年9月10日に、再開発事業に対する意向把握を目的とした、サンホセ地区住

民との意見交換会が開かれた(写真-2)。この際、これまでに市等が行ったヒアリング調査の不十分さが住民より挙げられ、加えて「住民意見が取り入れられない」といった事業計画への参加を当初から諦めている現状が明らかとなった。さらに移住を余儀なくされた住民の転居先が確保されていないことへの不満や不安などが挙げられ、住民の事業計画への参加意識が希薄なまま開発が進んでいる実態が把握された。これに対し筆者らは先進的な住民参加事業の紹介や成果の報告を通して、参加の意義やFESCOとの協働効果を住民に訴え、参加に対する住民意識の高揚が直接看取された。

(3) 本研究室提案に対する現地の進捗状況

第二回現地踏査では、2011年度に筆者らが提案したデザイン支援に対する進捗状況についても把握を行っている。まずオリバレス公園の全体設計コンセプトについては、今後の計画づくりの下地として踏襲され、加えて貧困に苦しむサンホセ地区児童のための社会福祉施設の建設予定地を筆者らが提案した視点場エリアに決定するなど、景観に配慮したコミュニティスペースの確保が成果として看取できた。しかし、都市計画課とERUMの役職者が市長選挙と同時に交代し、特にERUMとの情報共有が徹底できなかったこと、加えて大幅な修正には時期が遅すぎたなどの理由から、新設されるアパートメントの配置案の見直しにまでは至っていないことが把握された。

4. 社会福祉施設のデザイン提案

第二回現地踏査後、筆者らは上記視点場エリアに建設予定の社会福祉施設（在コロンビア日本国大使館の「草の根・人間の安全保障無償資金協力」による施設（以下 GGP））に対する早期の設計提案を行っている。GGP の建設予定地はオリバレス公園に面した丘陵地であり、市のシンボルツリーが植生する Yarumos Park への景観軸を考慮し、オリバレス溪谷の斜面側に開放部を取り、眺望を活かした施設デザインとした。また新設アパートメントと GGP の間にオリバレス公園へと繋がる地区特有の細道を配置し、施設外壁の一部には、伝統的建築様式の bahareque を使用するよう提案している。さらに施設南側に建設予定の展望スペースと GGP に付随する広場の連続性を確保し、その接続部は住民が Arepa の路上販売等を行える空間として設えた。

5. 途上国におけるデザイン支援活動の成果と課題

(1) 組織編成の把握と早期提案の重要性

既述したように早期に提案した公園全体設計コンセプトとは対照的に、新設アパートメントの配置修正案については事業関係組織の改変や担当者の変更および提案時期が遅かったことなどの理由から、実施計画の修正にまでは至らなかった。このように、海外支援においては、当該国特有の人事体制等の変更によって、実施設計担当者との連携や情報共有が難航することを当初より留意しておく必要がある。すなわち、海外での支援活動においては、GGP案で目指されたように、連携する組織の編成と業務の引き継ぎを考慮したうえで、デザイン支援の実行性を向上させる早期働きかけが重要といえる。

(2) 公正な成長を導くプロセス論的支援活動

JICAの支援を必要とする発展途上国では、住民参加等の合意形成に関わる手続的公正性に不備な点が指摘される事業も多い。しかし、筆者らが現地にて行った住民との直接的な意見交換や先進的な参加型事業の報告を通して、住民の参加意識の向上が垣間見られた。つまり、途上国の公正な成長を導く一助として、デザイン提案のみならず、住民参加の手続き的な理解を深めるプロセス論的支援活動の重要性も示唆できよう。



写真-1 斜面に建つ既存住居

写真-2 意見交換会の様子

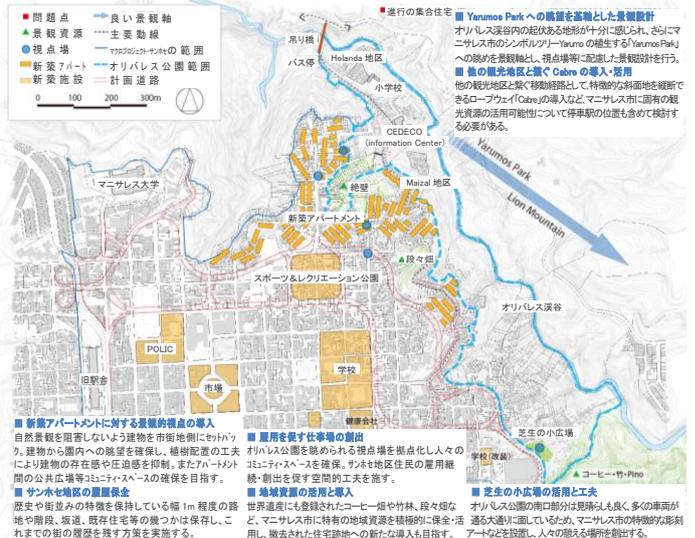


図-1 オリバレス公園及び周辺整備を含めた全体設計コンセプト

参考文献

- 1) 独立行政法人国際協力機構(JICA)HP, 公正な成長と貧困削減 <http://www.jica.go.jp/about/vision/index.html>